

# 大学生の英語

テストが商品として売り込まれることの弊害

阿部公彦

なぜ学生は勘違いするのか

外国語習得という面では今の学生は以前よりも恵まれている。各種デバイスを用いた教材も便利なものが増えているし、作文の自習を助けるシステムも充実している。加えて大学では学生の海外体験や留学を後押しする仕組みがあれこれ導入され、うまく利用すれば少ない自己負担で海外に行き、外国語のトレーニングをつんでくることもできるようになった。中には大学が丸ごと費用を負担するものまである。ただ、当然、こうした枠は競争があるので、選抜のために学生に「こうした体験活動は、しっかりと事前準備をすることではじめて意味を持ちます。あなたはどのよう  
な準備や訓練をしようと思っていますか? 具体的に書いてくだ

さい」といった質問を出したりする。すると、そんな質問に対し、驚くべき答えが返ってくることもある。

「TOEICやTOEFLなどのテストを受ける予定です」。おしま

い。え?と違ってしまふ。英語のテストを受けて弱点を見つけ、それに応じた対策をしたいというのならまだわかる。そして、こちらが訊きたいのはまさにその対策の内容なのだ。ところが「テストを受ける」だけで終わり。こういう答えをする人はテストを受ければ、英語力が自然とアップするとも思っているのだろうか。好意的に見れば「テストに向けた準備をすることで英語力がアップすることを目指します」というつもりかもしれないが、「TOEICやTOEFLなどのテストを受ける予定です(おしまい)」という

短い回答からは正直、そのような意向は見取れない。とりあえず思いつきで答えたのだろうなあ、と思ってしまう。

本稿であらためて考えたいのは、もし大学生の英語力(ここでは話の都合上、英語に話題を限定する)が伸び悩んでいるとするなら、その原因はいったどこにあるのかということである。果たしてその原因は、大学入試が四技能型でないことにあるのか？入試で民間試験を採用しないのがいけないのだろうか？あるいは大学に入ってから、英語のテストを受けさせないのはいけないのか。

私にはそうは思えない。むしろ「英語力を伸ばすために、どのような準備をするつもりですか？」と訊かれて、「英語のテストを受ける予定です(おしまい)」と答えるような学生がいることが問題ではないだろうか。もし大学生の英語力を伸ばしたいと本気で考えているのなら、こうした誤解に陥る学生を少しでも減らす努力をするべきではないか。以下、誤解の原因と改善のための対策について考えてみたい。

#### 共通テスト英語はなぜ歪なものになったのか

テストに対する認識を検証するきっかけとして、現在行われている共通テストを確認しておこう。本年一月、二〇二一年につづいて二回目となる大学入試共通テストが行われた。元々共通テストの英語は民間試験とセットで受験することが想定されていたこ

アクセント問題や並べ替え問題の廃止の根拠を以下のように書き換えている。

高等学校学習指導要領では、外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにすることを目標としていることを踏まえて、4技能のうち「読むこと」「聞くこと」の中でこれらの知識が活用できるかを評価する。したがって、発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題は作成しないこととする。(2)

なぜ問題形式を変更したかの理由説明がこのように融通無碍に書き換えられてしまうこと自体もいささかの疑念をいだかせるが、こうした共通テストの「理念」の迷走ぶりからはより深い問題も見えてくる(3)。その一つは過度なテスト信仰であり、もう一つは今となっては少々時代遅れにさえ思える「実際のコミュニケーション」や「実用」といった概念への執着である。

#### つくられた英語ブーム

大元にあるのは、英語テスト特有の事情である。もともと日本では戦後、幾度かの「英語ブーム」が起きたと言われる。その背後には終戦、東京オリンピック、大阪万博などさまざまな社会的

ともあり、やや奇妙な設計になっている。従来のセンター試験では発音・アクセント問題や並べ替え問題など、複数の技能を融合させる問題が含まれていたが、共通テストでは四技能型の民間試験導入に合わせるためといささか不可解な理由で融合型の問題が排され、四技能ごとに向けた問題構成になった。当初の大学入試センターの説明は以下の通りである。

英語の資格・検定試験の活用を通じて「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の総合的な評価がなされる方針であることを踏まえ、筆記「リーディング」の問題では「読むこと」の力を把握することを目的とし、発音、アクセント、語句整序などの問題は出題されません。(1)

要するに「検定試験」(いわゆる民間試験)があるから、従来の問題構成を変更したというのだが、そのロジックは不可解である。民間試験の及ばない範囲をカバーするために形式を変えたというならわかるが、どうも民間試験の四分離方式に似せて「四技能風」にしただけに見える。

結局、民間試験の活用は頓挫し、その結果、今に至るまで共通テストの英語は従来の計画とは異なる「片肺状態」が続いている。そのため、問題構成の歪さもいよいよ目につくことになった。実は大学入試センターは、民間試験活用の計画が潰れた直後、発音・

な要因があったが、寺沢拓敬は世論調査の結果などを踏まえて実際の「英語熱」に取り憑かれていたのはせいぜい人口の数パーセントから十数パーセントではないかと指摘し、「英語病」「英語信仰」といった見立てそのものあまり信憑性がないとしている(4)。では、このように実態のない「ブーム」が過剰にもってやされるのはなぜか。そこには「ブーム」だと言うことによって「ブーム」を起そうとする商業的な狙いがあったのではないか。英語周辺では消費者を消費財としての英語に導こうとする力が強く働いてきたのである(5)。鳥飼玖美子が「慢性英語ブーム」と呼ぶ状況は、こうして作り出されてきた(6)。

しかし、そんな「英語ブーム」にも転機が訪れる。かつては英語のマーケット化の舞台は英会話学校や個人レッスン、ラジオ英語などの学びの場だったが、それが「OEC」産業の隆盛に見られるようにテストとテスト対策にとってかわられたのである。一九七九年に最初のテストを行った「OEC」は着実に知名度を高め、二〇〇〇年には受験者が一〇〇万人を突破、二〇二一年には二二二万人にも及ぶ数の人がこの試験を受けることになる(7)。上記でも引用した鳥飼玖美子の『TOEFL・TOEICと日本人の英語力』は二〇〇二年の刊行だが、すでにこの時点で「ふと気づいたら、書店には英語検定試験の対策本があふれるように並び、(8)と」りつかれたように検定試験を受けまくる人たちが出てきた」という状況になっていた(9)。

興味深いのはこの「英語ブーム」が、日本人の「世界で突出して低いスコア」への嘆きに牽引されたことである。鳥飼も言うように、「驚くほど大勢の人々が「日本人の「TOEFL」スコア、ひどいものですねえ。世界で最低ですよ。あきたものです」など問題にする」のである<sup>(9)</sup>。それまで英語検定試験の中心的な存在と言え、国産の実用英語技能検定（英検）だったが、このような国際比較は国産の英検では構造的に不可能である。そういう意味では「TOEIC」や「TOEFL」による国際比較には新鮮味があったのだろう。しかし、他ならぬ「TOEFL」の作成元が明言しているように、現実問題として「日本人の「TOEFL」スコア」という枠はほとんど無意味であり、そうした比較は役に立たない。なぜなら、国によってこうしたテストの受検者層はまちまちであり、受検者層が広がれば平均点が下がるのはあたりまえだからである<sup>(10)</sup>。また、植民地化され英語が公用語となってきた国で英語運用能力が高い人が多いのは当然だろう。「TOEIC」もなれば、そもそも日本発の依頼で作られたテストであり、二〇一三年の数字では世界で七〇〇万人という受検者数のうち、日本が二四〇万人、韓国が二〇〇万人、この両国だけで実に六五パーセントもの割合を占めている<sup>(11)</sup>。ところが表に出てくるのはこうした割合や実態よめりも、「TOEIC I & R 国別平均スコア、日本は574点で31位」<sup>(12)</sup>といった、オリンピックの金メダル数を競うような煽り気味の（そしてまったく無意味な）数字ばかりなのである。

このように「慢性的な英語ブーム」は、今やテストとテスト対策が主戦場となっている。しかし、その実態は定かではなく、果たして人々がほんとうに「英語熱」を持っているのかは明瞭ではない。以前のブームと同じで、あえてブームを話題にし「日本は574点で31位」といった数字を煽り文句として使いながら、逆にブームを支えようとする姿勢がテスト業者やテスト対策業者には見られる。もちろん市場の巨大化に目をつけた業者の参入もあるから、それぞれの業者は自分たちのテストがいかにかに受検者にとって有用かを競って宣伝する必要もある。他科目のテストが今のところそこまで商業化が進んでいないだけに、英語に限ったこうした状況はかなり異様に見える。いずれにしてもこうしたテストのマーケット化から生まれる「テストを売らなければならぬ」という英語特有の事情が、英語習得のあり方にまで負の影響を及ぼしうることに注意する必要があるだろう。以下、こうした歪んだテスト信仰や「実際のコミュニケーション」への妄執の弊害について考察を加えてみよう。

#### テスト信仰の迷走

まずテスト信仰について考える。冒頭部でとりあげたような学生の反応の背後には「テストさえ受ければ、オレ／アタシの英語は何とかなる」という無根拠なテスト信仰が見え隠れする。そうした信仰を生み出したのは、テストブームを支えるべく社会に流通試験でもマークシート方式は利用される。マークシート方式と暗記とが直結するという指摘も誤りだ。下村がそもそもセンター試験の問題を一度でも見たことがあるのか？という疑問も払拭できないわけだが、氏はさらに進んで「精神的なもの」や「人間的な感性」が現代社会でいかに大事かを強調し、「大学入学試験ではそれは問われない」、だから「入学試験改革」をするのだといった驚くべき主張を展開する。

たとえばサッカー日本代表キャプテンの長谷部誠選手は『心を整える』という本を出していますが、身体を鍛えるだけでなく、精神的なものをすごく意識している。それが一流選手としての要素になっているんじゃないかなと思う。

ロボットの適切であるかというよりは、人間的な感性です。よね。すでにそういう時代には移っているんですよ。

ところが大学入学試験ではそれは問われない。つまり教育の仕組みが遅れている。時代の変化に合わせた改革が、高大接続入学試験改革です。

下村によれば、ここで言及される「精神的なもの」や「人間的な感性」を実現するのが英語民間試験の活用や記述式の導入だと

布されてきた「受検者〇〇〇万人」とか「日本人の平均点は世界〇〇位」といった言説である。こうした過剰なテストへの視線は、めぐりめぐって「適切なテストを受けて診断する方がいい」「適切なテストを受ければ学力がある」というような（よく考えてみると明らかに奇妙な）誤解へとつながりうる。民間試験の活用を主導した下村博文元文部科学大臣はこうした誤解を助長するのにも多大の力を注いだ人物の一人である。あるインタビューの中で下村は、自分の功績の中でもっとも大きなものがセンター試験を廃止したことだ、と誇らしげに語ったうえで、以下のように説明を加える<sup>(13)</sup>。

下村 私が文部科学省の大臣に在任した2年10カ月の間に、67項目の「同時改革行程表」をつくって進めました。その一つが、高大接続・入学試験改革でした。

センター試験には限界があります。与えられた選択肢から答えを一つ選ぶというマークシート方式で、暗記していることを正確に出せるかを問う試験です。それは近代工業化社会では必要となる能力ですが、今、世の中は情報化社会に移っている。

下村はこのように言うが、実際にはセンター試験の後継となった共通テストでも同じマークシート方式が採用されているし、民